

国民革命時期における戴季陶の対日観について

——『日本論』の再検討を通して——

嵯
峨
隆

はじめに

第一章 五四時期の思想傾向と対日観

第二章 「戴季陶主義」の形成とその特徴

第三章 国民革命時期の対日観——『日本論』の世界——

第一節 「我が日本観」から『日本論』へ

第二節 『日本論』の中の中国革命論

おわりに

はじめに

本稿は、戴季陶の代表的著作の一つである『日本論』を、彼の思想的転換と現実の政治的課題との関連で検討しようとするものである。⁽¹⁾

戴季陶（一八九一—一九四九）は生前の孫文に秘書兼日本語通訳として仕え、孫の死後は国民党内における蔣

介石の権力確立に思想面から貢献した人物と知られている。一九二〇年代半ばに形成される彼の思想は「戴季陶主義」と称され、中国共産党を初めとする左翼陣営からは国民党内の反動潮流の代表的な存在と見なされた。その彼をして、孫文から蒋介石への「軋轍機の役割」を果たしたとする見方は、正鵠を射たものと言うことができるであろう。同時に、彼はまた党内きつての日本通としても知られ、本稿で扱う『日本論』は同時代の中国人による分析としては群を抜いた存在であり、その水準の高さは今日の中国においても、思想に対する批判とは切り離して好意的に評価されているところである。

『日本論』は、一九二七年に執筆され、翌二八年の春に上海民智書局から出版された。該書が当時の中国人の対日観に大きな影響を与えたであろうことは、後の蒋介石の論調が戴季陶の見解を踏まえたものであることを念頭に置けば、極めて容易に推察されることである。然るに、これまでの研究においては、『日本論』の内容については様々な角度から分析がなされているにも拘らず、該書に現われる対日分析・評価を戴の当時の思想傾向と、彼を取り巻く内外の現実的課題との関連で論じたものは少ないように思われる。しかし、対日観が対外観の一部を構成するものであって、しかもそれがある種の思想性を基礎とするものである限り、それは単独で取り上げられるべきものでないことは明らかである。

さて、筆者は既に前稿⁽³⁾において、五四時期に戴季陶によって書かれた「我が日本観」を、当時の彼の思想傾向との関連で論じた。「我が日本観」は、八年後に執筆される『日本論』の前半部分の基礎となるものである。しかし、後者の内容は前者の単純な延長線上にあるものではない。そこで、八年の時間を挟んだ両者の間の質的相違が如何なるものであるのか、次に問われるべき問題として生じて来る。先行研究の中には、既にこの問題を扱ったものが幾つかある。しかし、それらは概ね戴季陶自身の思想的变化、そして内政・外交といった当時の中国の課題との関連に十分関心を払ったものとは言い難いように思われる。むしろ、孫文死後の国民革命進展の中、

戴が国民党右派の理論家に移行する過程との関連で、『日本論』を分析することによって、この問題は明らかにされたと考えられるのである。

第一章 五四時期の思想傾向と対日観

一九二〇年代における戴季陶の思想転換と、その中で執筆された『日本論』の具体的な問題に入る前に、先ず彼の初期の思想傾向と日本に対する見方を概観しておくことにする。

日本問題についての戴季陶の言及は辛亥革命勃発直前に始まるが、初期における彼の対日本観の特徴は、日本人の民族性を念頭に置きながらその中国侵略の危険性を指摘していたことである。そうした厳しい対日評価に変化が生じるのは、一九一三年二月から翌月にかけて、戴が孫文の秘書兼通訳として日本を訪れた後のことである。即ち、彼は帰国後に書いた論説において、日本の国力と人種を根拠として日中提携論を唱えたのである。⁽⁴⁾しかし、この変化は明らかに孫文からの影響によるもので、必ずしも内発的なものであったとは言えない。そのため、彼の対日提携の姿勢は堅固なものとはならず、その基底に存在する対日批判の論調はしばしば噴出するところとなっていたのである。⁽⁵⁾

五四時期の戴季陶の思想傾向は、社会主義への接近を以て特徴づけることができる。一九一九年九月、彼は「経済上から中国の乱源を観察する」という論説を発表しているが、そこではマルクス主義の理論を用いて中国の社会分析を行っていたのである。そして、翌二〇年に書かれた文章においては、労働者階級と資本家階級が相容れない存在であり、階級闘争が不可避であることを明言するようになる。⁽⁶⁾

戴季陶によれば、ロシアを起点とする社会主義革命の世界的波及は必至である。何故なら、革命によって変革

されるのは全世界共通の制度であつて、一国の制度ではないからである。それでは、世界革命へと向かつて行く歴史の方向の中で、中国の現在の課題は如何なるものであるのか。戴の考えでは、中国の労働運動の現在の課題は「生活の改良」であつて、政治的労働運動は未だ実行不可能である。それは、労働者自身の生活が些かでも改良されて初めて可能となるものである。従つて、現在必要とされることは、マルクス主義を根幹とする科学的社会主義を学び、各国の労働運動、社会主義運動の経験に学ぶことであつた。⁽⁷⁾

ここから容易に理解されることは、戴季陶は一九一九年から二〇〇年にかけて急速にマルクス主義に接近して行つたにも拘らず、それは中国における先鋭的な階級闘争を志向するものではなく、むしろそれは穏健な労働運動を求めるものであつたこと、そして思想的「左傾化」にも拘らず、それは革命運動と関連づけられたものではなかつたということである。彼の意識の中では、社会主義中国の実現への期待感希薄であつたと言えるのである。

それでは、戴季陶の思想的「左傾化」によつて、対日観はどのようなものとなつたのであろうか。まず、五四運動発生直後の彼の対日観を示すものとして屢々言及されるものに「日本国民に告げる書簡」がある。ここでは、朝鮮半島と中国大陸に政治的・経済的に拡張することを日本の「伝統的政策」であるとし、日本は黄色人種の独立自存を公言しながらも、実際には黄色人種を侵略するアジアの敵であると論じていた。⁽⁸⁾しかし、彼は反日運動の中の熱狂的な部分に対しては批判的であつた。例えば、民衆の中に湧き起こつていた日貨排斥運動に対しては、それが一時的手段であつて中国救済の根本方策とはなり得ないこと、従つて、中国の国民自決は国民自決によつてのみ達成されるものと考えていたのである。⁽⁹⁾

以上のような文脈の中で執筆されたのが、一九一九年八月の『建設』創刊号に掲載された「我が日本観」である。戴季陶がこの論説を執筆した動機は、これまで中国人の日本研究が極めて少ないことに鑑みて、日本人の性格、思想、風俗習慣、国家と社会の基礎などを明らかにし、これらを中国人の前に腑分けして提示する必要性が

あると考えたためである。⁽¹⁰⁾ 五四時期の排日的気運の中で、かかる問題意識を持ち得た人物は恐らく稀であったろう。戴はここで、日本の歴史的・文化的背景の分析に紙幅の約半分を費やしている。その内容の多くは、部分的に書換えられながら後の『日本論』に受け継がれるものであるため、ここでは敢えて深く検討することはせず、その思想との関連の問題だけを取り上げておくことにする。

「我が日本観」の前半部分で、戴季陶は封建時代の日本人の性格を代表するものとして武士階級と町人階級の分析を行なっているが、彼によれば、時代の趨勢によって武士が全てを独占した時代は既に終わりを告げ、明治維新以後生じたところの武士と町人の混合時代もまた過ぎ去って行くものと見なされた。それでは、将来の日本社会は如何なるものとなるかという点、戴は次のように述べる。「将来、それも近い将来の日本は『労働者』『農民』の時代であつて、『武士』や『町人』の時代ではない。『民主主義』の時代であつて、『軍国主義』の時代ではない。『社会主義』の時代であつて、『資本主義』の時代ではない。『人』の時代であつて、『神』の時代ではない」⁽¹¹⁾。こうした趨勢の中で、変革の役割を担うことができるのは、ただ労働者・農民だけであると見なされるに至った。ここには、極めて明瞭に日本の社会主義化への期待が現われていること、そしてそれが当時の彼の思想傾向の反映であったことが理解されるのである。

戴季陶の評価によれば、ヨーロッパ大戦勃発後の産業の発展に伴って、日本の労働者の階級的自覚は高まり、革命的気運もまた高揚しつつあつた。そのような状況認識の下、今後の日中関係は如何なるものとなるべきなのか。日本は、従来からの侵略を旨とするような「伝統的政策」を放棄しなければならないことは言うまでもないことであるが、それは現在の政治体制下では全く不可能である。それが可能となる唯一の条件は、日本で労働者階級が立ち上がり社会主義革命を実現することであつた。かくして、戴季陶の考えの中では人種論や民族論的立場は後退し、階級的立場が前面に押し出されるところとなつたのである。

だが果たして、日本における社会主義革命実現の可能性は存在するのか。戴季陶の考えでは、当時の日本での普選要求の運動の高まりは、そうした傾向を顕著に示すものであった。そこには、日本で革命実現の暁には、对中国政策も大きく転換するだろうという樂觀的見通しがあったのである¹²⁾。それでは、中国の方は如何にあるべきなのか。もちろん、中国が現状のままで良いはずはない。日中双方で革命が発生して初めて、両国は良好な関係に入ることができるのである。彼は次のように述べている。「両国人民の親善と結合とは、両国の平等、自由、互助を旗印とする社会革命の成功の後に初めて実現することができるのである。何故なら、両国の国際的強権主義、即ち資本主義が発生させた帝国主義及び経済帝国主義は、革命を除いては消滅させることができないからである¹³⁾」。

以上のような戴季陶の見解には、「親日」か「反日」かという二分法を越えたマルクス主義的国際連帯の姿勢が現われている。しかし、彼自身が自国の運動に関わって行こうとしたり、あるいはそれを構築しようとする意識は極めて希薄であった。それは、彼が「左傾化」したにも拘らず、マルクス主義を運動との関連で認識しなかったことに起因するものと考えられる。ともあれ、五四時期の戴季陶の対日観は、日本社会を文化的・歴史的に分析しつつ、日中の階級的連帯を基礎とした社会的変革を志向するものであったと言えるのである。

第二章 「戴季陶主義」の形成とその特徴

戴季陶は、マルクス主義に接近し、中国社会主義青年団の一員として中国共産党の結成準備に関わったが、一九二一年七月の正式な成立に加わることはなかった。中共不加入の理由については、孫文との個人的な繋がりが

指摘される一方、コミンテルンの提示した建党方針に同意できなかったためであるとも言われている。⁽¹⁴⁾ 結局、彼はこの後、マルクス主義に批判的な立場に急速に移行することになる。そこで本章では、彼の新たな対日観形成の基礎となる思想傾向について見て行くことにする。

一九二三年末、国民党改組が本格化すると、戴季陶は孫文から臨時中央執行委員に任じられるが、改組の動機が主体性を欠いたものであるとの不満から、上海に在って広東には行こうとしなかった。彼にとつて、ソ連⇨コミンテルンという外部勢力との提携は、仮にそれが物質的援助をもたらすものであったとしても、革命の主体性を害う危険性を持つものであった。国民党の絶対的指導性を確保するということが、ソ連⇨コミンテルンに対する彼の基本的姿勢であったのである。孫文の再三の説得によつて、彼は翌年一月の国民党一大大会に出席するが、共産党員の二重党籍問題に危惧を覚え、大会終了直後には広東を離れ、上海に戻った。国民党の組織的純化と排他的指導性という主張は、この後一貫して唱えられることとなる。しかし、この時点ではそれはまだイデオロギ―的にならぬ高められたものではなかった。

国共合作成立後の戴季陶は、内政・外交の両面において、大枠としては孫文の側近の立場で発言し、行動していた。イギリスに対抗して日本をも巻き込もうとした「大陸同盟説」の支持などはその事例の一つである。⁽¹⁵⁾ しかし、この頃から彼の孫文思想解釈は極めて独特なものとなつて行く。例えば、彼は一九二四年末に訪日した際に日本の新聞に発表した論説において、孫文を国家主義者⇨孔子の再来と見なし、漢代以降の道家思想が蔓延する中で国家意識の高揚が求められている現在、孫文思想を宣揚することは儒教の復権を意味するものであると論じていたのである。⁽¹⁶⁾

戴季陶によれば、孔子の思想は格物致知、正心、誠意、修身、齊家、治国、平天下に尽きるものであるが、これを更に解剖すれば、誠意、正心を中心としてその左に格物致知があり、右に修身、齊家、治国、平天下がある。

このうち、誠意、正心がなければ全ての行いが生じてこない。しかし、知らなければ行の生じる根柢はない。それ故、結局のところ孔子の教えでは、格物致知が根本となる。ところが、宋学においては正心、誠意を重く見るが、格物致知を忘れ、しかもその解釈が難解なものとなった。これに対して、孫文の考えでは、何よりもまず知が重要であるとされる。何を知ることかと言えば、それは修身、齐家、治国、平天下である。これを知ることができれば、正心、誠意は可能となる。即ち、格物致知は知であり、修身、齐家、治国、平天下は行である。孫文がかくも知の必要性を説くのは、現在の中国における知識排斥の風潮、道家思想の影響を打破する必要性があると考えたためであった。⁽¹⁷⁾これが、戴による孫文の知行説への伝統主義的解釈の始まりであった。こうした傾向は、反共主義のイデオロギー化の開始と言うべきものであり、孫文死後に至って更に明確になるものである。

一九二五年三月一二日、孫文は滞在先の北京で病死した。その三日後、戴季陶は「孝」と題した文章を発表し、そこで彼は「先生が逝去された今日、先生の主義を受入れる我々は、誠意を以て先生に対して孝を尽さなければならぬ⁽¹⁸⁾」と述べていた。そして、彼はこの後、国民党内における孫文思想の絶対化に取り掛かることになる。彼によれば、「我々の今日の唯一の責務は、総理の遺囑を完全に接受すること」であり、「我が党は全体が一致して総理の遺教をその通りに実行し、新たに改作することは許されぬ⁽¹⁹⁾」とされたのである。

前述したように、戴季陶は国共合作成立当初から、国民党内においては一つの主義に忠誠を尽すべきであると考えていた。それが今や、更に強調された形を取って現われることとなったのである。彼はこの後、『孫文主義の哲学的基礎』と『国民革命と中国国民党』を発表する。前者は三民主義に伝統主義的解釈を加え、また後者は中共の国民党内での寄生政策を批判しており、いずれも反共主義を前面に押し出したものであった。そのため、中共およびコミンテルンからは強い反発が示され、これ以後「戴季陶主義」の名称を以て批判されることになる。さて、戴季陶主義の根幹をなすと見なされるのは『孫文主義の哲学的基礎』（一九二五年六月初版）である。以

下、その内容と特徴について簡単に見て行くことにする。

戴季陶は本書において、孫文思想を完全に儒家思想の延長線上で捉えようとする。彼は孫文の思想を以下のよう
 に要約することができると言う。「天下の達道は三、民族なり、民権なり、民生なり。之を行なう所以の者は
 三、智なり、仁なり、勇なり。智仁勇の三は天下の達徳なり、之を行なう所以のものは一なり。一とは何ぞ、誠
 なり。誠なるものは善を択つて固執するものなり」⁽²⁰⁾。そして、戴は「三達徳（智仁勇）」を「能作」、「三達道（民
 族、民権、民生）」を「所作」とし、「誠」を民族精神の原動力とした。この「能作」は孫文の道徳に関する主張で
 あつて、古代中国の正統倫理思想を継承したものである。そして、孫文の特徴は、「何時如何なる場合にあつて
 も、力を尽して中国固有の道徳的文化的意義を鼓吹し、中国固有の道徳的文化的価値を賛美したこと」⁽²¹⁾であると
 される。このような伝統的価値の存在こそが民族の自信を生み出し、現実の革命としての所作の前提となるもの
 であつたのである。

かくして、以前においては下位に置かれていた「民族固有の歴史的精神」が、今や前面に押し出されることと
 なつた。こうした考えは、新文化運動時期に普及した考え——そして戴季陶自身も当時それに共鳴していた——
 を否定することによって可能となるものである。彼は本書において次のように述べる。「昨今、一般の人々は孔
 子を尊崇する者は全て反革命であるとし、中国国民文化の墮落の原因は彼らにあらんとする傾向にある。〔中略〕
 ここから、思想上からみれば、革命と反革命との区別が中国的であるか非中国的であるかという区別に転化して
 しまつた。これは実に悲しむべき現象である」⁽²²⁾。むしろ中国の伝統は、歴史的な社会構造の変容を超越して有効
 性を持つ価値であると考えられるに至つたのである。

それでは、中国革命の特徴は如何なるものであるのか。戴季陶はここで、中国社会には明白な階級対立は存在
 しないため、階級対立的な革命方式を採用することはできないとする。また、階級対立の出現を待つて、初めて

革命を起こすことも不可能である。むしろ、中国における革命と反革命の対立は、覚醒した者と覚醒しない者との対立であって、階級間の対立ではない。それ故、今日の中国で必要とされることは国民全体の覚醒を促すことであって、一つの階級の覚醒を促すことではない。「知難行易」説の革命運動における意義はここにあるとされるのである。⁽²³⁾

さて、戴季陶によれば、革命は利他心から生じるものであって、利己心から生じるものではない。それ故、仁愛は革命道徳の基礎である。中国が階級的に未分化であるため、革命達成のためには、被支配者層の人々が自覚して自らの利益を求めることに加え、支配者層を覚醒して被支配者層の利益を凶ることが必要とされた。⁽²⁴⁾ こうした傾向は、階級調和論の立場以外の何物でもなかったと言いうことができるであろう。⁽²⁵⁾

ここに現われた戴季陶は、五四時期の社会主義者としての彼の姿勢とは正反対のものである。何故に、このような転換が可能となったのであろうか。その要因としては先ず、彼の社会主義認識における問題点を指摘しなければならぬ。即ち、前章で指摘したように、彼は思想的「左傾化」にも拘らず、それは本来的に中国における先鋭的な階級闘争を志向するものではなく、しかもそれは運動に高められる契機を持つものではなかったのである。彼にとっての社会主義は、観念の産物でしかなかったと言わなければならない。

それでは、以上のような儒家の伝統の全面的肯定は、戴季陶の内面にある文化的保守主義の噴出であったのだろうか。だが、彼はその社会化の過程において、伝統学術を専門的に治めた形跡はない。彼は清末に、ある人物から国学の手ほどきを受けたということであるが、⁽²⁶⁾ それとてもさほど深遠なものではなかったと考えられる。そうだとすれば、彼が全面的に保全しようとしたものが儒家的伝統のものであったかどうかは甚だ疑問である。

戴季陶にとって、先ず何よりも保全されるべきと考えられたものは、国民革命遂行における国民党の排他的指導性であった。当時、中共の指導による労農運動は急激な勢いで成長しつつあった。即ち、一九二五年一月には、

広州で第二回全国労働大会が開かれ、この大会を通して中華全国总工会が誕生した。委員長の李偉民を初めとして執行部は中共黨員で占められ、総工会傘下の労働者は五四万人を数えるに至っていた。こうした国民党の対抗勢力の成長は、階級闘争を尖鋭化させること、更には突出した反帝国主義活動によって列強に介入の口実を与えかねないことから、国民革命の実現を危うくさせかねないものであった。かかる危機の回避に向けて、儒家的調和の伝統は極めて有効に作用するものと考えられたのである。

しかも、コミンテルンⅡ中共による「世界革命の一環としての中国革命」という位置づけは、戴季陶の考える国民革命における国民党の排他的指導性と抵触するものであった。そして、当時の時代状況における民族及び個人レベルでのアイデンティティの危機は、内向的かつ後ろ向きなナショナル・アイデンティティの模索を要請していたと考えられる。⁽²⁷⁾ 戴季陶は恐らく当時、この問題を敏感に感じ取ったものと考えられる。その意味で、戴による儒家の伝統の強調は極めて便宜的なものであったと見ることが出来る。だが、以上のような主張は、曾ての社会主義への接近時期における人民の主体性を重視する立場とは正反対のものであることは言うまでもなく、周知の如く後に蒋介石によって積極的に利用されて行くことになるものである。この意味で、戴は蒋介石支配のイデオロギー的基礎を作り上げたと言いうことができるのである。

第三章 国民革命時期の対日観―『日本論』の世界―

一九二七年二月、戴季陶は南京政府から進行中の国民革命についての理解を求めべく命を受けて日本に派遣された。一ヵ月半にわたる日本滞在において、戴は「世界平和と中国の独立自由とが不可分のものであること」⁽²⁸⁾を訴え、総計八十数回にわたる講演及び私人との懇談を行なった。帰国後間もなく、蒋介石による反共クーデタ

一が発生したが、戴はその後に書いた文章において、「この度の国民党の独立は中国独立の基礎であり、国民党の心がようやく取り戻されたのである」と評価した上で、蒋介石のこれまでの忍耐と今回の決心は「黨員としての模範である」としてこれを称えた。⁽²⁹⁾ 今や戴季陶の立場は鮮明となった。そして、このような政治的立場の下で書かれたのが『日本論』であった。

第一節 「我が日本観」から『日本論』へ

『日本論』は全二四章によって構成されているが、前述したように、その前半部分である一四章は何らかの形で「我が日本観」を取り入れたものである。「我が日本観」と『日本論』は、それぞれ異なった問題意識の下で書かれたという意味では独立した著作であることは言うまでもないが、ここでは先ず前者から後者への書換えの跡を検討することによって、戴季陶の思想的変化が新たな対日観に如何なる形で反映しているかを見て行くことにしよう。

『日本論』に付された序文の中で胡漢民は、「我が日本観」について「主観が勝ちすぎていた」と評し、「ことさら相手を悪く言おうとして、相手の長所まで短所としているところがある」と指摘して⁽³⁰⁾いた。戴季陶は『日本論』ではその点を改めたと述べており、確かに全体を通してそのような傾向は顕著である。例えば、前著では封建時代の日本人には「同胞觀念」が欠如していたとされていたが、『日本論』ではそうした指摘が消滅しているのはその現われの一つであると言えよう。

『日本論』の前半部分で特徴的なことは戴季陶が武士道と明治維新に多大な関心を払い、それらに極めて好意的な評価を与えていることである。まず武士道について、戴はそれが発生的には「奴道」に過ぎず、封建主義の下における封禄に対する報恩の主義であるとしながらも、制度から起こったそれが後に、「道徳としての武士道、

さらには信仰としての武士道の意味に使われるようになった」点に着目すべきであるとし、徳川時代の武士道が如何に生活的な潤いに富んでいたかを見てはじめて、武士階級が維新の原動力となったかを理解できると述べている。⁽³¹⁾

戴季陶の見るところでは、明治維新は明らかに近代的統一国家の樹立であったが、その事業は武士という特定の階級によって成し遂げられたものであった。そして彼は、そこに「唯物主義者の階級闘争理論が革命史の實際に適應しないことの有力な証明材料を発見することができる」と言う。⁽³²⁾即ち、維新は確かに農民階級を解放し、農民の土地所有権と政治的・法律的地位向上をもたらしたが、それは農民の自発性に起因するのではなく、武士階級の志士仁人が鼓吹することによって生じたものであった。それはまさに「代行革命」と称すべきものであったが、こうした彼の見方が当時の反共主義を前面に押し出した思想傾向の反映であること、そして来るべき中国革命のあり方を表明したものであることは極めて容易に窺い知ることができる。即ち、そこには「孫文主義の哲學的基礎」で述べられた、支配者層の覚醒による利他的革命に通じるものが存在しているのである。

前著「我が日本観」における記述では、戴季陶の明治維新についての評価はさほど高いものではなかった。以前の彼の評価によれば、それは日本の歴史においては長足の進歩であったとしても、「世界文明史の陳列棚で比較してみればその内容は極めて貧弱なものであった」⁽³³⁾とされていたのである。然るに、『日本論』になるとこうした記述は削除されたばかりでなく、徳川三百年の治績の中からその成果を評価すべきであるとされ、⁽³⁴⁾代行革命たる維新をもたらした内発的要因に精神的蓄積の検討が向けられるようになった。また前著では、日本人はもって生まれた性格を理解しようとせず、逆に自らを「神秘化」しようとする傾向を持っており、それが日本の進歩を妨げる原因の一つであるとされていた。⁽³⁵⁾しかし『日本論』では逆に、「こうした自尊心が民族の存在と発展の基礎となる」⁽³⁶⁾ものとして肯定的な評価を与えられることになる。かかる「自己保存の能力」と「自己発展

の能力」こそ、戴が日本民族の長所として評価する点であり、日本が「東方諸民族中の先進的地位を占めるまでになった」要因であった。⁽³⁷⁾そして、それは中国人に欠如したものと考えられていたのである。

それでは、日本人のそうした能力の源となったものは何であったのか。戴季陶の考えでは、それは武士道にあった。即ち、「生死を軽んずる」「信義を重んずる」「意気を尊ぶ」という武士に特有の精神は、彼らの生活意識によって形成されて来た道徳と信仰を最大の要素として生じたものである。そして、「自己の生命、家族の生命を犠牲にしても、主家のために闘おうとする」⁽³⁸⁾精神は、日本人の中に現実主義と責任意識の強さという、中国人には見られない性格を賦与し、それが明治維新とその後の近代化を成功に導く大きな鍵となったと考えられたのである。

このように見てくれば、日本人の精神は今や極めて肯定的に評価されていることが理解されるのであるが、しかし現実の中国はその日本人によって侵略を受けているという状況下にある。このことは、一体何故であるのか。前著においては、武士に固有の侵略精神が強調され、それが維新以後の大陸侵略に繋がったことが指摘されていた。⁽³⁹⁾しかし、武士道への肯定的評価が際立つ本書では、逆にそれが中国人には欠けた海外雄飛の精神として評価されるようになる。むしろ、前著以上に本書で強調されている負の要素は、武士の精神とは対極にある「町人根性」である。

戴季陶によれば、江戸時代に形成された町人根性は「信義を軽んじ金銭を重んずる」「ユダヤ的現金主義」そのものであって、それは不道徳さと同時に常に残酷さという特徴をも併せ持つものである。彼は次のように述べる。「ヨーロッパ人はアメリカに渡って、数十万の土人を惨殺した。私はいつも思うのだが、あのような残酷な行為は純粋な戦士にできることではない。彼らが武器を持った商人や徒刑者の類だったからこそできたことなのだ」⁽⁴⁰⁾。日本の町人もこれと同様であって、本来政治上の弱者であった彼らが生活上の勝者となるには、そのよ

うな性格にならざるを得なかったと言うのである。以上のような説明の中には、明治維新以降の支配者層の変質と、それに伴う侵略主義——それは当時において最も露骨な形で現われていた——の台頭の根拠が暗示されていると言うことができる。

さて、戴季陶の評価によれば、明治維新の成功の主要な原因は次の二つに尽きるとされる。即ち、時代の切実な要求があったこと、そして人民の間に共通の信仰があったことである。「民族の統一した思想、統一した信仰、統一した力」こそが、日本の維新を成功させた最大の要素であった⁽¹⁾。ある特定の英雄的指導者が、政治的変革という大事業を達成させたのではなく、それは民衆の中に広く行き渡った共通の思想が存在したからであったと言っているのである。

もちろん、戴季陶のこうした指摘は、歴史的事実の厳密な分析や考証によるものではない。むしろ、それはフィクションでしかなかった。そしてそのフィクションは、直面する国民革命の指針となる思想——三民主義を国民全体が共有し、信仰の対象とすべきであるという、当時の極めて現実的な課題に基づくものであったことは言うまでもない。我々はここに、孫文の死の直後から戴が取り掛かっていた三民主義の絶対化の試みが、日本の維新史の中に投影されていることが理解できるのである。

だが、これも当然のことであるが、国民革命時期の戴季陶には、五四時期のように民衆を変革の主体とするような考えはない。「我が日本観」が『日本論』へと発展する過程で、曾て日本の社会主義的変革の必要性を論じた最後の二章が脱落していることはそのことを象徴的に示している。彼は既に大規模な変革事業は特定の階層、或いは勢力によって代行されなければならないと確信するに至っていた。従って、民衆が思想を共有すべきだとは言いながらも、民衆には主体的な役割を求めてはいなかったのである。

それでは、代行革命たる明治維新の後、日本の政治発展は順調であったのかと言えば、戴季陶はこの点では否

定的な評価を下す。その理由は政党制の未成熟の中にあつた。即ち、日本では民権の基礎が未確立であり、立憲政治は形式・内容ともに未成熟な状態である。そのため、政党も他者に依存して辛うじて成り立っているのが現状であると判断されたのである。⁽⁴²⁾彼の考えでは、政党の生命は確固とした独立性にあり、その独立性の維持のためには革命性が必要である。それでは、その革命性と独立性とは何かと言えは、それは「革命の主義」「革命の政策」「革命の策略」であり、これらの三者は「革命の領袖」「革命の幹部」の下で、初めて存在が可能となると考えられたのである。⁽⁴³⁾

以上のような説明の中に、当時の中国の政治状況が色濃く反映されていることは容易に看取することができるであろう。即ち、政党の独立とは国民党の純化を意味し、革命の主義とは三民主義（それも戴季陶によって新たに解釈を加えられたもの）であり、そして革命の領袖とは当時の状況下では明らかに蔣介石を意味していたのである。このことは、四・一二クーデター以後の状況の正当化という意図を含むものであつた。戴はここで、近代日本における政党の問題点を持ちだしながら、現在および今後の国民党が排他的に、国民党という事業を遂行していかなければならないということを言外に述べていたのである。

以上において『日本論』の前半部分の検討を行なつて来た。それは前著である「我が日本観」を下敷きにしたものではあつたが、その書換えには明確に当時の戴季陶の思想性が反映されていたことが理解される。そして同時に、そこには今後の国民革命のプログラムという現実の政治的課題もまた反映されていた。その中国革命の方針については、『日本論』で新たに書き加えられた後半部分においてより具体的に展開されることになる。

第二節 『日本論』の中の中国革命論

『日本論』後半の一〇章が前半部分と比べて特徴的な点は、日本の文化や歴史に関する記述に比べて、当時の中

国と直接・間接に関係する事柄の割合が増えていることである。

先ず、第一五章の「国家主義の日本と軍国主義の日本」は、『日本論』後半の実質的な序章とも言うべき部分である。ここで戴季陶は、孫文の『三民主義』の民族主義理論を援用して民族と国家の区分を行ない、前者は自然力によって作られ後者は武力によって作られたとする。また「主義」については、それが「一種の思想であり、そこから信仰が生まれ、さらにその信仰が力に変わる」という孫文の解釈を提示している。こうした記述は、明治維新成功の要因を論じた前半部分の内容に対応するものであり、ここで彼が孫文思想を国民共通の主義にしようとしていることは明らかである。

孫文によれば、民族の成立において最大の役割を果たすものは「混合」であり、その混合する事象とは血統、生活、言語、宗教、風俗習慣の五つであるとされていた。戴季陶もこのことを前提とするのであるが、彼の場合、それらの要素の混合に当たっては「力」が結合の中核になることを強調している点で特徴的である。そして戴は、理想とする「主義」が実現されるためには組織された軍事力が不可欠だと言っているのであるが、このことが当時の国民革命の深化という現実的課題を意識して論じられたものであることは言うまでもないであろう。

然るに、「国家は武力で作られる」という鉄則があるにも拘らず、当時の中国では武力についての正当な理解が欠けており、戴季陶はこれを中国思想界の最大の弱点であると指摘する。こうした弱点を克服するためのヒントは日本の歴史的経験の中にあった。即ち、「日本民族の歴史上の諸思想、および日本の維新の思想的根柢を眺めた場合、『武力』と『戦争』が建国のもつとも肝要な手段であることが、いつそう深く理解できる」とされ、日本人は武力についての正しい理解を持っていたが故に近代的国家を建設することができたと評価されるのである。ここに、中国の統一に向けて、日本の尚武精神が積極的に学ぶべき対象であるとされたのである。

尚武精神に加えて、中国人に欠けたものに民族の自信力がある。これは民族の生命とも言うべき統一性と独立

性を育てる要素であり、日本と中国の強弱を分けているものはここにあると考えられた。中国人が革命をこれまでに達成できず、逆に帝国主義が中国を思いのままに操ることができたのはこの「不自信」の故であった。しかも、「中国人でありながら中国人としての自信がなく、寄らば大樹の蔭とばかり、外国人にしつぽを振るしか能がない⁽⁴⁵⁾」という特質は、革命運動の中にも見られる。それは、ソ連とコミンテルンの「指導」という名の支配を許容している共産党の体質に現われていると見なされた。戴季陶の考えでは、一国の政治運動は他者に依存したものであってはならなかったのである。ここでは民族性という観点から論じられているものの、これは以前に国共合作の形成に反対した時と同様の論理によるものであったことが理解される。

戴季陶が喝破するところでは、マルクス・レーニン主義は国際主義を標榜しながらも、ロシアでの革命は結局のところ民族主義的な形で成就されたものである⁽⁴⁶⁾。そうだとすれば、ソ連は実質的に帝国主義国家に変貌する可能性を持つものであり、そのような国家の指導に甘んじて従うことは亡国的精神の現われにほかならなかった。

だが、国家建設に当たっては外国からの支援は必要不可欠である。そこで戴は、中国が外国に主体的に接するべきであるとして次のように述べる。「こちらが外人顧問を使うのではなく、逆に外人顧問に使われるのでは、これは自殺行為に等しい。もっとつっこんでいえば、外人顧問を使いこなす能力を備えた政府をわれわれがつくりだし、この能力を備えた領袖をいただかぬかぎり、われわれの建設は、絶対に緒につかない⁽⁴⁷⁾」。以上のような所説の中には、孫文に匹敵するような絶対的指導者の登場を待望する姿勢が窺えるのであるが、これは前節で触れたように、当時の国民党内における蒋介石の立場を念頭に置いたものであったと言えるであろう。

さて、今後、国民革命を遂行するために必要なものは、革命に参加する人々が自己犠牲の精神を持つことである。先に述べたように、日本には武士道精神の素地があったために、維新を達成できたと見なされた。戴季陶は『日本論』の後半部分においては、そうした精神を支えるものを「信仰」という言葉で表現する。この言葉は

「信念」という意味で用いられているのであるが、彼によればこれは個人および社会の進歩と団結にとつての最大の機能を果たすものであり、これもやはり日本人にはあつて中国人にないもの一つであつた。「信仰とは計算ぬきのもの、計算不能のものであり、すこしでも計算がまじれば信仰は成立しない」⁽⁴⁹⁾ものであるが故に、常に計算ずくな中国人には希薄なものであつた。逆に、日本人の信仰生活はより純粹かつ積極的、非打算的であつて、日本人の犠牲的精神はこの信仰生活が作り上げたものだと言はれたのである。

このように見てくれば、中国革命の達成のために日本に学ぶべき点はただその精神的側面にあつたと言ふことができる。既に中国には三民主義という革命思想は存在し、そして蒋介石という革命政党的指導者も存在した。依然として欠けているものは、革命を実行に移すための精神であつた。戴季陶によれば、思想とは単なる机上の空論や無責任な子供の遊びではなく、生命の中心である。「思想は信仰に変わらなければ力となりえず、生命と合体しなければ信仰となりえない。信仰を卑しむ唯物史観では、人生の意義は理解できず、ましてや民族の生存の意義は解明できない」⁽⁵⁰⁾のである。三民主義が偉大である理由はここにあると考えられたのである。

以上のことから、『日本論』の主題の一つが日本を鑑として中国革命の達成を目指すことであつたことが理解されるであろう。だが、日本は現実政治の面においては軍国主義国家として中国革命の妨害者として存在する。戴季陶によれば、日本の軍国主義化は「民族的宗教信仰」に基づく政治文化と、近代突入時期の国際政治環境に起因する必然的な成行きと見なされていた。⁽⁵¹⁾然るに、彼にはその軍国主義の質がこの数年間のうちに大きく変化したように見えた。それは、具体的には桂太郎の死を契機とするものであつた。即ち、「かれの死を境として、一方では思想界に他方では国際政治に、大変動が起つた。日本の軍国主義が下り坂に向かつてただでなく、全世界の国家の基礎が例外なく革命期を迎えた」⁽⁵²⁾と見なされたのである。

戴季陶は『日本論』の中で桂太郎を極めて高く評価している。それは戴が一九一三年春に日本で行なわれた孫

文と桂の会談に通訳として同席し、この時彼ら二人が東方民族の復興を中心とする世界政策に基づいた日中提携論を唱えており、戴もそうした主張に共鳴したことによるものであるとされる⁽⁵³⁾。しかし、戴の桂に対する評価の客観性には問題があると言わざるを得ず、それに加えて、桂に対する彼の以前の厳しい批判からすれば⁽⁵⁴⁾、ここでの好意的評価からは一種異様な印象を受ける。しかし、桂に対する過分な評価は、その世界戦略への共感だけによるものではなく、その後の田中義一内閣(一九二七年四月発足)への強い反発と対をなすものであったことからすれば、その持ち上げようには納得が行くものがある。それほど、田中内閣は中国革命の妨害者として立ち現われていたのである。

戴季陶によれば、田中義一の活動は桂太郎とは違って、「日本の伝統思想、伝統政策、伝統勢力に依存して、自分の頭脳と才智のありたけを運用しただけ」であって、「政権を維持することしか眼中になく、政治的理想など持ち合わせていなかった⁽⁵⁵⁾」。要するに、田中は品性下劣な政治家であって、反革命Ⅱ反動の象徴であるとされたのであり、その对中国政策の力点は、中国の統一を妨害することに置かれ、この数年間にわたる中国の混乱は例外なく彼の方針によるものであった。そして、田中こそは「第二のセルヴィアの中学生⁽⁵⁶⁾」となつて、次の大戦のきっかけを作り出すであろうと予測するのである。ここに至つて、曾て孫文の時代に模索された日中両国の革命的連帯の道は完全に放棄されたことが理解される。

しかし、第一次山東出兵に見られるような当時の日本政府の侵略主義や反動性は単に田中義一個人の資質によるものではない。そこには明らかに日本社会の変質というものが存在していると考えられた。それは尚武の精神の衰退である。尚武の精神とは単に武を重んじるという一面的なものではなく、平和と互助の習性によつて調和され、補われるものでなければ有効なものとはならない。曾ての日本では、中国文化と仏教文化の普及によつて尚武と尚文の融合が見られた。しかし、近年に至つてそれらはいずれもが消滅の危機にあるというのである。最

近の日本社会の変貌——そしてそれは将来的な危機に繋がるであろう——について、戴季陶は次の三点を指摘する。

第一に、日本人の自信力が減少し、それにつれて社会および民族の亀裂が拡大していることである。信仰が薄弱化し、逆に迷信がはびこっており、どの階級も尽く打算的な商業心理¹¹「町人根性」に支配されている。第二に、日本人の信仰心の減少は民族の美術性の破壊を生み出し、尚武精神と平和精神の低落へと繋がって来ている。第三に、美を愛する精神が破壊され、社会生活は平和を失い、人生の内容が次第に無味乾燥となっており、その結果、能動的尚武は受動的闘争へと変貌を遂げている。そして、社会組織の欠陥が拡大し、社会全体に革命的恐怖の空気が蔓延しているのである。⁵⁷⁾

以上の三点は、戴季陶が本書において、武士道精神に象徴される日本民族の美点として評価したものと対極に位置するものであって、紛れもなく日本のアジア侵略の背景をなすものと見なされている。彼が尚武精神の中に認めた美徳とは自己犠牲の精神であって、他者を害うようなものではなかった。翻って、田中義一に代表される最近の日本は、彼が日本人の最も悪しき性格であると見なした町人根性の上に武士道の外套を纏った存在にほかならなかった。

従って、当面の課題である国民革命の達成のためには、曾ての生氣潑刺たる日本人の精神には学ぶべきであっても、今やこうした体質に変貌しつつある日本とは如何なる一致点も見出すことができないことは明らかであった。かくて、中国革命の過程において、内政面では日本は統一のモデルとして積極的に評価されつつも、対外面では否定的に捉えられるということが『日本論』の最終的な結論であった。ここに我々は、日本の歴史と文化に対する戴季陶の評価が、現実の政治的課題と密接な関連を有していたことが理解されるのである。

それでは、今後の日本との関係はどのようなものであるべきなのか。五四時期の戴季陶は、将来の日本の社会

主義的変革に日中兩國の良好な関係の構築の可能性を見出していった。しかし、『日本論』の中ではもはや将来の可能性が論じられることはない。それは、八年間という時間を挟んだ彼の思想的転換を反映するものでもあったことは言うまでもなく、孫文死後に新たな段階に入っていた国民革命の達成を優先させるという意図に基づいたものでもあったと考えられる。しかし、それと同時に——或いはそれ以上に——、彼が田中内閣の政策に代表される日本の侵略主義に対する曾てないほどの危機感を持つに至ったためでもあったと考えられる。侵略を旨とする日本の「伝統的政策」は、もはや放棄することは不可能となったばかりでなく、逆にここに至って強化されたものと判断されたのである。その意味で、『日本論』は戴の日本への絶望の表明であったと考えられるのである。

おわりに

私は本稿において、『日本論』に見られる戴季陶の日本観の特徴を、その思想的転換と国民革命時期の政治状況との関連で検討して来た。ここで明らかにされたのは以下の諸点である。

五四時期における戴季陶は社会主義に接近したことから、その日本観にも社会変革への強い願望が反映されていた。しかし、孫文の死の前後から、彼は急速に反共イデオロギーを形成して行った。その特徴は儒家的伝統によって三民主義を解釈しようとするものであったが、その底流には国民党が排他的かつ階級調和的に革命を遂行する意図が込められていた。それは、人民を変革の主体とする五四時期の考えとは正反対の立場に立つものであり、蒋介石のリーダーシップを想定するものであった。

『日本論』は以上のような戴季陶の思想的变化の産物であった。そのため、それは単なる日本の歴史的・文化的考察を目的とするものではなかった。そのことは、五四時期に執筆された「我が日本観」からの書換えの跡から

容易に看取できるものであった。確かに、『日本論』の前半部分は「我が日本観」を下敷きにしたものではあったが、明治維新を武士階級による代行革命と見なすように、曾ての唯物史観の色彩が払拭されたばかりでなく、歴史的に形成されてきた武士道精神が近代日本の発展の基礎になったとするように、日本人の精神性に高い評価を与えていることは、明らかに国民革命の新段階を視野に入れたものであったことが理解される。即ち、そこには、国民党の排他的指導性と、三民主義の信仰対象としての絶対化という意図が込められていたと考えられるのである。

『日本論』が「我が日本観」と大きく異なる点の一つは、日本の侵略性に対する際立った危機感が表明されていることであった。戴季陶は以前から日本を軍国主義国家と見なしていたが、その危険度は今や大幅に増大したように見えた。即ち、田中義一の政権獲得に伴い、日本は中国革命の最大の妨害者として立ち現われたと考えられたのである。そこには、以前の社会主義を支持していた時期における日中の革命的連帯の発想はもろろんのこと、孫文が曾て案出し戴もまた支持したとされる、日本のアジア回帰を前提とした世界戦略¹¹大陸同盟説の痕跡もない。この段階で日本は、既に中国革命の敵以外の何者でもなかったのである。

以上のことから、『日本論』の中での「日本」の位置づけが二重構造になっていることが理解できる。即ち、内政面では国家建設の精神的モデルとしてあり、外交面では克服すべき対象としてあるということである。そして、それらはいずれもが国民革命の最終段階の状況を反映するものでもあった。この意味において、この時期の戴季陶にとつての日本は愛憎半ばする存在であったのである。

(1) 戴季陶についての研究は最近増加の傾向にあるが、この数年間に国内で発表された論稿の中で彼の対日観に関するものとしては、俞慰剛「戴季陶『我が日本観』から『日本論』へ」(『環日本海研究年報』、第八号、一九九六年三

- (月)、同「孫文の対日観・アジア観と戴季陶」(新潟大学大学院現代社会文化研究科『現代社会文化研究』第六号、一九九六年一月)、同「戴季陶の日本人論―『日本論』を中心に―」(『現代社会文化研究』第七号、一九九七年二月)、同「中国人の武士道論―戴季陶の『日本論』を中心に―」(『埼玉大学紀要(教養部)』第二号、一九九八年)、趙軍「武器としての日本論―『日本論』から見た戴季陶の日本観」(『大アジア主義と中国』、亜紀書房、一九九七年)、張玉萍「辛亥期における戴季陶の日本認識(一九〇九―一九二二年)」(『中国研究月報』第六〇号、一九九八年一月)、同「討袁時期における戴季陶の日本観(一九一三―一九一六年)」(『近代日中関係史研究の課題と方法―梅屋庄吉とその時代―報告集』、梅屋庄吉関係資料研究会、一九九九年三月)、賀淵「戴季陶的日本観(一九一〇―一九三二)」(同前)、望月敏弘「戴季陶の初期日本認識について―辛亥革命から日本亡命時期を中心に―」(小島朋之・家近亮子編『歴史の中の中国政治―近代と現代―』、勁草書房、一九九九年)などがある。
- (2) 近藤邦康「一九三〇年代中国における抗日の思想」、『運動と抵抗・下(ファシズム期の国家と社会 八)』、東京大学出版会、一九八〇年、二八〇頁。
- (3) 拙稿「五四時期における戴季陶の対日観について―社会主義認識との関連で―」、『東洋学報』第八二卷第二号、二〇〇〇年九月。
- (4) 「強権陰謀之黒幕」(一九一三年八月四日)、桑兵・黄毅・唐文権編『戴季陶辛亥文集』、中文大学出版社、香港、一九九一年、一四〇二頁。
- (5) 一九一七年から翌年にかけて、『民国日報』紙上に発表した「最近之日本政局及其对华政策」などはその事例として挙げられるであろう。
- (6) 「新年告商界諸君」(一九二〇年一月一日)、唐文権・桑兵編『戴季陶集』、華中師範大学出版社、武漢、一九九〇年、一〇九六頁。
- (7) 「關於労働問題雜感」(一九二〇年五月一日)、同前、一二三三、一二三九―一二四〇頁。
- (8) 「張継何天炯戴伝賢告日本国民書」(一九一九年五月九日)、邦訳、小島晋治ほか編『中国人の日本人観一〇〇〇年史』、自由国民社、一九七四年、一三三―一三四頁。
- (9) 「国民自給与国民自決」(一九一九年六月八日)、『戴季陶集』、八七五頁。

- (10) 「我的日本観」(一九一九年八月一日)、同前、九二四頁。
- (11) 同前、九四四頁。
- (12) 「日本会発生革命嗎」(一九二〇年三月一九日)、同前、一一八〇頁。
- (13) 「資本主義下面的中日關係」(一九二〇年七月一七日)、同前、一二八一頁。
- (14) 範小方・包東波・李娟麗『国民党理論家戴季陶』、河南人民出版社、鄭州、一九九二年、一三三二頁。
- (15) 例えば、戴は一九二四年一月から翌年にかけての北上に同行して日本に立ち寄った際に、日本人記者からの質問に答えて、当時の孫文の主張である日本―中国―ソ連の提携を「我が党の主張である」として全面的に支持していた(「東亜の一員であることを忘れて了った日本」、『大阪毎日新聞』一九二四年一月二三日)。なお、「大陸同盟説」については拙稿「国民革命時期の戴季陶の対日観について」(「近きに在りて」第三八号、一九九八年五月)を参照されたい。
- (16) 「支那を救ふは国家主義」、『大阪毎日新聞』一九二四年二月二八―三〇日。
- (17) 同前。
- (18) 「孝」(一九二五年三月一五日)、中国国民党中央党史編纂委員會編『革命先烈先進詩文選集』第四冊、中華民国各界紀念国父百年誕辰籌備委員會、台北、一九六五年、四七九頁。
- (19) 「中国国民党接受總理遺囑宣言」(一九二五年五月二四日)、陳天錫編『戴季陶先生文存』第三冊、中央文物供應社、台北、一九五八年、九六八―九六九頁。
- (20) 『孫文主義之哲學的基礎』、民智書局、広州、一九二五年、七頁。
- (21) 同前、八―九頁。
- (22) 同前、四六―四七頁。
- (23) 同前、四〇頁。
- (24) 同前、四一―四二頁。
- (25) 五三〇運動に際して、戴季陶が日系企業の労資紛争の調停に奔走したことは、こうした考えを実践に移したものであったと見ることが出来る。

- (26) 陳天錫『戴季陶先生編年伝記』、中華叢書委員會、台北、一九五八年、一二〜一三頁。
- (27) 野村浩一『蔣介石と毛沢東』、岩波書店、一九九七年、四五〜四六頁。
- (28) 「記民国一六年使日時事略」(一九四五年初冬)、『戴季陶先生文存』第四冊、一九五九年、一四三八〜一四三九頁。
- (29) 「国民党的独立是中国独立的基礎」(一九二七年五月)、『革命先烈先進詩文選集』第四冊、五三六、五四二頁。
- (30) 胡漢民『日本論』序、市川宏訳『日本論』、社会思想社、一九七二年、一八七頁。
- (31) 『日本論』、一九頁〜二〇頁(以下、引用は全て邦訳を用いる)。
- (32) 同前、二七頁。
- (33) 「我的日本観」、九三〇頁。
- (34) 『日本論』、二九頁。
- (35) 「我的日本観」、九三〇頁。
- (36) 『日本論』、三〇頁。
- (37) 同前、三一頁。
- (38) 同前、三四頁。
- (39) 「我的日本観」、九三六頁。
- (40) 『日本論』、四二頁。
- (41) 同前、五五〜五六頁。
- (42) 同前、六九頁。
- (43) 同前。
- (44) 同前、七八頁。
- (45) 同前、一一一頁。
- (46) 同前、一二三頁。
- (47) 同前、一二四頁。
- (48) 竹内好『戴季陶の『日本論』』、同前、二四三頁。

- (49) 『日本論』、一四九頁。
(50) 同前、一五六頁。
(51) 同前、八一〜八二頁。
(52) 同前、八六頁。
(53) 同前、九七頁。
(54) 戴季陶は曾て、「桂太郎は武人政治家である。その主張は大陸侵略主義であり、その性質は強情であり、その手段は悪辣である」と評していた（『日本内閣辞職観』、『民権報』一九二二年二月五日、『戴季陶辛亥文集』下冊、一三〇九頁）。
- (55) 『日本論』、一一三頁。
(56) 同前、一四二頁。
(57) 同前、一七〇〜一七二頁。